

平成30年度  
青少年問題調査研究会  
第2回議事録

日 時：平成30年11月15日（木）10:00～12:00

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

○司会 それでは、時間になりましたので「青少年問題調査研究会」を開会いたしたいと思ひます。皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

内閣府の青少年担当では、有識者や実務家の方から子供・若者に関する最新事情を御講演いただき、「青少年問題調査研究会」を開催しております。この研究会では、現代の青少年が置かれた多様な状況を反映して、健全育成、育成支援等、多岐にわたる分野の問題・課題をテーマにし、そのテーマに精通されている大学教授など有識者の方々やNPOの活動家の方々などをお招きしてお話をお伺ひしております。

今回は本年度第2回目の研究会といたしまして、NPO法人わかものまち 代表理事 土肥 潤也先生、NPO法人あおもり若者プロジェクト クリエイト 理事長 久保田 圭祐先生を講師としてお招きしております。

土肥先生は現在、早稲田大学大学院社会科学研究科に在学中であり、都市コミュニティデザイン論を専攻されております。静岡市・焼津市の両市で「わかものまち運動」を立ち上げられ、子供・若者がひとりの市民としてまちづくりに参画できる社会を目指し、研究・実践を行っておられます。また、久保田先生におかれましては、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程を修了されております。2009年に、当時、地域課題となっていた東北新幹線新青森駅開業に向けて、地元高校生としてまちづくり活動を展開されました。現在もまちづくりを通じた社会教育や居場所づくりを目指し、活動を行っておられます。

本日でございますが、「地域を担う人材の育成について」と題しまして、これまでの活動などを御紹介いただくとともに、地域を担う人材の育成についての展望も御講演していただく予定でございます。

それでは、はじめに土肥先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 「地域を担う人材の育成について」

NPO法人わかもののみち 代表理事 土肥 潤也氏

○土肥氏 NPO法人わかもののみち代表理事の土肥潤也と申します。ただいま御紹介いただいたところですが、私の方から改めて簡単な自己紹介をさせていただき、静岡での活動、全国への広がり、若者参画を取り巻く課題・提言という流れで進めていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

現在私は早稲田大学の大学院に在学しており、焼津と東京を行き来しながら活動を行っています。プロフィールに「子ども・若者の地域参画コーディネーター」と書かせていただきましたけれども、これは僕の中で考えたい問い（テーマ）として「少子高齢・人口減少社会において子ども・若者の参加をどのようにデザインすれば、持続可能な地域社会の実現につながるのか？」ということに向き合っていきたいというところから掲げています。

実は5年前にもこの「青少年問題調査研究会」で講演させていただきました。そのときにここで御紹介をさせていただいたのが、YECという中学生とか高校生のやりたいことを大学生が実現していくというサークルで、静岡県立大学の津富宏先生という方が顧問をされているのですが、そちらの学生団体で活動していて、そこから発展するような形でNPO法人を立ち上げて、今に至っているという経緯があります。

私たちのNPOのミッション、目指していきたい社会は「静岡を世界で一番、若者に優しいまちにすることで、すべてのまちを“わかもののみち”にします」ということを目指しています。

もともとは私たちの活動のルーツは欧州、特に北欧諸国を参考に活動をさせていただいています。私たちNPOでも年に1回はスウェーデンに行き、向こうの実践をいろいろ見て、研究をしながら活動させていただいています。

今日御紹介させていただく「わかもののみちのつくり方」も、スウェーデンの実践を参考にしながら提案させていただいているような事例になります。

私たちの活動の目標は、今、私たちがスウェーデンに若者参画の視察とか研修に行っているわけですが、何十年後かわからないですが、長期的には、スウェーデンの方から逆に静岡に来たくなるようなまちをつかっていきたいと思って活動しています。

私たちの団体が最も大切にしている価値観は「“私”からはじまるまちづくり」という考え方です。私たちは中学生や高校生と関わることが多いのですが、中高生が普段始める、関わっているまちづくりというと、例えば学校でやるような清掃活動であったりだとか、あるいは老人ホームに訪問したりだとかで、これはどちらかというと高校生の思いとか、高校生が「やりたい」と言うところから始まるというよりは、先生から始まるまちづくりになっていると思っています。なので、高校生とか中学生が、これが私の地域課題だとか、私がこういうふうなまちを変えていきたいとかという「“私”からはじまる」というところを大切に活動しています。

細かい沿革はいろいろあるのですけれども、もとをたどると、先ほども御説明させていただいた2013年からNPOで、YECという団体で活動させていただいてから、いろいろな先進地域を見たりする中で、2015年からわかものまちなちという活動をさせていただいています。

私たちの活動は大きく3つ柱を立てています。1つは若者参画のプロジェクトで、実際に中学生とか高校生と関わっていくような活動になります。

2つ目は、ロビイングの活動でして、これは私たちが目の前の中学生とか高校生と関わって「“私”からはじまるまちづくり」というものを実現していくのには、幾つかの限界があるなと思っていて、私たちが関われる中学生とか高校生の数も限界がありますし、本当にそこだけではなくて、地域とか社会の枠組みも変えていかなければ根本的に解決しないのではないかと考えまして、実際に若者が参画しやすい地域をつくっていく。若者が参画できるまちをつくっていくというようなロビイング活動もしています。

そして3つ目に、こうした実践をさせていただく中で、今は、全国の実践支援をさせていただいておまして、今年度に関しては、例えば京都市のほうも若者議会を立ち上げるみたいな動きがありますし、そちらのお手伝いさせていただいたり、今年度はもう1つ、茨城県のほうでハイスクール議会というのをやっています、どういうふうにハイスクール議会を進めていけばいいのかということ、実際に高校生と関わられる方の研修みたいなこともさせていただいているような形です。

つい一昨日は、実は、杉並区内のPTAの方たち向けに講演をさせていただき、今はその後、学校の先生から、今度は学校からどのように地域参画を進めていけばいいのかみたいなことも、これからお手伝いさせていただくようなことで、この前お話しさせていただきました。

何でこういう活動をし始めたのか、という経緯をざくっと説明させていただきたいと思っています。もともとは人口減少が、私たちにとってかなり大きなキーワードになっているかなというふうに思います。

2014年の人口移動報告が出たときに、静岡新聞の1面に「本県転出超過7240人 2年連続ワースト2」と出ました。静岡は東京と名古屋の間にあるので、どちらにでも行きやすいということで、個人的にはそんなに悪い場所にはないと思っているのですけれども、ただ、流出数がかなり多いと出ていました。

この当時から、私はYECという団体で活動させていただいていたのですけれども、この新聞を見たときに、静岡の人口減少がやばいというふうに感じました。

それから実際に、この人口減少に対してどういうふうにまちが対策を打っているのかということいろいろ調べていると、まち・ひと・しごと創生法ができてから各市町村で地方創生の総合戦略をつくったりだとか、人口の計画をつくったりだとかが行われていたのですけれども、そこに参加している会議のメンバーというのは、いわゆる有識者と言われる人たちでした。要するに僕らからすると、これは若者の問題だと思ったのに、若者が参加する余地がないということに対して問題意識を持ちました。

そこで、静岡市に対して何かできないかと考え、静岡市内にいろいろなまちづくりとか社会活動をしている学生団体とかNPOがありましたので、その代表者たちに片っ端から、一緒に何かできないか、と声をかけました。これを始まりに、人口減少対策に対して若者から提案していくような運動が、私たちのNPOの最初のスタートになっています。

このとき、高校生とか大学生が集まって、15人ぐらいの実行委員会だったのですけれども、とある高校生が私に言ったのは、ここにいる、いわゆる社会から「意識高い」と揶揄される高校生とか大学生の声だけを提言しても意味がないのではないかと。要するに、まちにはもっといろいろな若者たちがいるのだから、そういう若者たちの声も聞かなければいけないのではないかとわれまして、どうやってそれを聞けばいいのだろうと思ったのです。そうしたら、街中に飛び出せばいいのだと意見が出て、みんなで街中に飛び出し始めました。

これは3、4年前ぐらいの僕の写真なのですけれども、ホワイトボードを持って街中に飛び出して、そこを歩いている中学生とか高校生に、ちょっと時間いいですかと聞いて、まちに対して思っていることだとか、どういうことが課題だと感じるのか、みたいなことをいろいろ聞きました。

最終的に1カ月間ぐらいの活動だったのですけれども、いろいろなパワーを持っている高校生とか大学生が実行委員会にいたこともあって、2,000人分の声を集めることができました。

ここで出てきた声というのは非常に多様でして、例えばこの3人がいる写真ですけれども「ディズニーランドを静岡に」と書いてあるのです。あとは「無料でバスができるアリーナをつくってほしい」とかいろいろな意見が出てきまして、これはいろいろ分析していきました。例えば交通政策に対してのインフラをもっと拡充してほしいというものもありましたし、あとは家から学校までの通学路が暗過ぎるとか、街灯をもっとつけてほしいというものもありましたし、若者が集まれる場所がないとか、遊べる場所がないとか、いろいろあったのですけれども、これを各論的に政策提言をしていっても、一時的にしか解決しないと思いました。

若者たちはよく社会に関心がないとか、政治に関心がないとかというふうに言われるのですけれども、実際に声を聞くと、形としては「ディズニーランドを静岡に」と言っているかもしれませんが、ただ「ディズニーランドを静岡に」と言っている背景があると思うのです。何でそう思うのかというところをしっかりと深堀って、そこに寄り添って、まちに対して声を届けていなければならないと思いました。

最終的には、この各論の政策ではなくて、若者の声を届け続けるパイプが必要ではないかと思い、若者参画を進める3つの柱と10の提言を取りまとめ、静岡市に対して提言しました。

例えば、若者の声を届ける、先ほど若者議会と言いましたが「静岡まちづくりわかもの会議」の発足を目指す、であったりだとか、若者と地域をつなぐユースコーディネーター

が必要ではないかということであつたりだとか、いろいろな提言をさせていただきまして、これを実際に、まだ現職ですけれども、静岡市の市長に政策提言をさせていただきました。

この運動は非常にメディアにも取り上げられまして、約1カ月間の活動で関連の報道が20回を超えまして、1カ月間、必ずどこかの新聞かテレビが私たちの活動を取り上げていただいているようなことにもなりました。

ここまで来たら、市長もきっとこれを進めていきますと言うだろうと僕らは高を括っていたのですけれども、ただ、市長の反応は意外と厳しくて「行政に求める前に、自分たちでやるぐらいのエネルギーが欲しい」というふうに言われました。

このとき、聞いたときはむっとしたのですけれども、確かにこの意見も一理あるなというふうに思いました。要するに、自分たちで活動していないのにいろいろ求めるというのは、確かに違うところもあったのかなというふうに思ひまして、今まで運動として実行委員会にしていたものを、継続的に活動していこうということで団体化しました。

この時期は任意団体として活動を始めまして、例えば静岡市の若者がみんなが集まって「静岡若者フェスタ」というイベントを開催したりだとか、私たちの原点は街頭に出ているということがありますので、さらに街頭に出たりだとか、あと、真面目なイベントだけやっても、そこの層の若者にしかアプローチができないということで、地元のアイドルとかを呼んできて、一緒にクリスマスのイベントをやったりだとか、いろいろな活動をしていました。

この時期に活動をもっと継続的にやっていく必要があるというところと、やはり寄付金の獲得とかもこれから考えていかなければいけないというような話がありまして、しっかりNPOとして活動したほうがいいのではないかとということで、NPO法人化しました。

このNPOにした流れというか、たまたまだったのですけれども、最終的には静岡市の総合戦略の重点事業の1つに、「わかものまち」推進事業というものが取り入れられることになりまして、若者による自主的な地域活動への支援や、まちづくりへ若者の参画を充実させるための方策を検討し、必要に応じて実施するというので、静岡市総合戦略の重点事業として「『わかものまち』推進事業」というものが平成27年から始まりました。

もちろん、私たちのほうで提言をさせていただいた全ての提言が実現するわけではないので、そのうちの1つ、取っ掛かりとして何を実現するのが良いのかを静岡市の方とお話させていただき、まずは若者の声を集める会議体のようなものをつくってはどうかということで、1年間の試験事業として「静岡市わかもの会議」が発足しまして、これの全体のコーディネートを私たちのNPOでさせていただくという形で活動がスタートしました。

実は、この静岡市わかもの会議自体は単年度の事業として終了しまして、現在はいろいろな経緯から「高校生まちづくりスクール」という、高校生に焦点を絞ったまちづくり参加のプログラムになっていまして、これも継続して私たちのNPOのほうで運営をさせていただいているような状況になっています。

こうして活動していましたら、私の出身が実は静岡県の焼津市というところなのですけ

れども、カツオの漁獲高が全国第1位なのですが、特に焼津市は3.11以降に、港町なので津波の心配から内陸のほうに人口が流出していきまして、人口が減っており、危機感がかなり強かったということもあったのと、私の地元だったこともあり、焼津市のほうからも何かできないかとお話がありました。

焼津市のほうからお話があったときに、何かできないか、と言われても難しいなというふうに思ったので、やはり私たちの原点は、若者の声を聞いてまちをつくっていくということではないかということで、「わかものまち焼津フォーラム」というものを2015年7月に実施をしました。この中で、若者だけではなくていろいろな多世代の方の中から「どうしたら焼津は若者に優しいまちになれる？」ということテーマに、皆さんでワークショップをしながら意見を聴取していきました。

80人もいたので非常にいろいろな意見が出てきました。例えば、部活動を強制にする学校をゼロにしてほしいであったりだとか、若者と商店街で地域のおじいちゃん、おばあちゃんが買い物をしていたら若者に優しいまちなのではないかであったりだとか、通学路での挨拶が普通になっていたら若者に優しいまちなのではないかと、いろいろ出てきたのですけれども、若者たちの声の中で最も多かったのが、若者が自由に集まれる場所が欲しい。若しくは、他の学校に友達が欲しいというようなことが、声として一番多く出ました。

これはある意味、若者が今、自由に集まれる場所がないことの裏返しだと思います。これを見まして、いきなり場所をつくるのは焼津市としてもハードルが高かったとは思いますが、そこを頑張ってくださいまして、今、焼津駅前に若者の地域交流拠点として「若者ぶらっとホーム やいばる」という施設を、静岡福祉大学が焼津市にあるのですが、そのサテライトキャンパスの3階に設置をさせていただいているような状況になっています。

こうした若者の拠点の活動は、全国的に最近広がってきている印象があります。私たちの拠点の大きな特徴は、大人から、ここが若者の居場所だよとか、ここが若者の秘密基地だよと言われても、それは大人の押しつけではないかと考えていましたので、やはり若者がつくる若者の拠点としていきたいという思いで、2年間、かなり長い時間なのですが、設置準備の過程をかけまして、若者たちと一緒に、ここにどのようなものがあたらいいとか、ここを運営していく上でのルールをどうすればいいとか、そういうことについて民主主義的に一緒に決めていった経緯があります。

まず、1年目の会議は、焼津市と私たちのNPOと、福祉大学も一緒に運営しましたので、その3者での調整をいろいろさせていただきました。その後の1年間は中学生、高校生、大学生たちと2週間に1回ぐらいのペースで一緒に会議をしていました。

これがそのときのキックオフのワークショップです。私たちの施設は、実は非常に狭いスペースで、焼津市として、施設を設置してくれたのはすごくありがたいのですが、毎年高校生たちから、この拠点をもっとよくするためにはどうすればいいかという意見を聞いていると、それはとにかく、もっと広い場所に移してほしいという声がいつも出てき

ます。

本当に狭くて、10人ぐらいいるとちょっとおなかいっぱいという感じのスペースなので、もう少し広くできるかなと思ったりもしているのですけれども、そんな場所で活動しています。

最初は、拠点の設計図を書こうということで、いろいろな拠点の設計図を書きました。これはアイデアのブレインストーミングですけれども、そのときにたまたま小学校6年生の男の子も参加してくれていて、ここに何が欲しいかと書いたら、2階の真ん中らへんにあるのですけれども、ディズニーストアをつくりたいということを書いたりだとか、コンビニが欲しいとか、カフェが欲しいとか、いろいろなことが出てきました。

ただ、もちろんディズニーストアをつくったりとか、コンビニをつくるということではできないので、今、ある条件の中でどういうふうにこの拠点を、最大限使っていくためにはどうすればいいかということを考えていきました。

一緒に作戦会議を重ねていって、このような感じでやっているのですけれども、試しに拠点を使ってみようみたいな話になって、夏と一緒に映画会をやったりですとか、会議をやっていたら、僕はクリスマス会を企画したいのですという高校生が突然現れたりとかして、高校生たちの中でもこの会議のこととかが周知されて、ここに行けば何かできるらしいぞみたいな雰囲気が出てきたのかなというふうに思っています。

拠点の名前を決めるという過程が最も大事なのではないかと、高校生たちの意見からも出ました。この拠点を決める過程に関しては、会議に参加している高校生だけではなくて、市内の高校生とか大学生からも意見を聞こうとなりました。

大体、焼津市に住んでいる対象年齢15歳、中学生から19歳ぐらいまでの年齢。いわゆる10代が1万1000人ぐらいいおり、この1万1000人のうちの10%は声を集めたいよね、という話で、拠点の名前を決めるアンケート調査をしました。

このアンケートも、多分、私から学校とかに対してアンケートをお願いしますと頼めば、それは楽なのですけれども、ただ、やはりここにいる高校生たちが自分たちで集めたいという思いがあったので、高校生たちがアンケート用紙を束で持って、校長室のドアをノックして、校長先生、アンケートをやらせてくださいと直談判をいろいろな学校でして、断られた学校もあったみたいなのですけれども、それで声を集めてきました。

最終的に1,160人分、目標の10%を集めることができまして「若者ぷらっとホーム やいばる」という名前に決定しました。

もともと「やいばる」という名前は、焼津の「焼」と、拠点があるのが焼津市の栄町というところがありまして「栄える」というのが、英語で調べていたら「palmy」という英語がありまして、ただ、高校生は英語が読めなくて、それを「パルミー」と読んでいたのです。それでは「やいばる」がいいのではないかとということで「やいばる」になりました。

もとは「若者のたまり場 やいばる」というのを高校生が考えていたのですけれども、ただ、いろいろ高校生たちが議論していて、ここはスペースとして狭いし、焼津市として



は、ここは人口減少対策としてつくったという経緯も高校生たちは知っていたので、ただのたまり場にしてはいけないのではないかと高校生から逆に提案がありまして、若者がそこに居つくのではなくて、そこを拠点にしながら、地域に出ていくようなプラットフォームにしてあげたいのではないかとということで「若者ぷらっとホーム やいばる」という名前になりました。

やっとな年の2月にオープンしまして、今も活動しています。

今日は、地域を担う人材の育成ということですので、今、やいばるでどういう活動が起こっているのかについて紹介したいと思います。

私たちの活動の柱は大きく3つありまして、若者が自主的に立ち上げるプロジェクトをサポートさせていただくということと、若者と地域の交流を促進していくということと、安心安全な居場所を提供していくということです。

どのようなことをやっているかということ、お化け屋敷とかバケツゼリー大会とかをやっています。お化け屋敷も、もともとは高校でお化け屋敷を文化祭でやっていた子たちが、その年はいろいろな理由から、お化け屋敷を学校の文化祭でやってはいけないということになってしまったと。ただ、私たちはお化け屋敷はやりたいし、という話があって、だったらここでやればいいのかと言って、高校生たちが地域の小学生とか子供たちに向けてお化け屋敷を企画するというのをやりました。

私はいつもバケツゼリー大会がすごく大事だと思っています。今回、私が話させていたっているのは「“私”からはじまるまちづくり」という、まちづくりをテーマに話しているのですけれども、何かまちづくりと言うと、すごく高いところを求められがちだと思っていて、例えばいわゆる清掃活動みたいなものもそうですし、商店街活性化みたいなものもそうなのですけれども、ただ、中学生とか高校生がまちづくりの活動をしていくときに、やはりまちを変えられるとか、自分の思いが形になるみたいなことを自分の気持ちとして持っていなければ、そういうところに向かっていけないと思っています。そう考えると、高校生の最も身近なことから言うと、いわゆるバケツゼリーができないまちでは、まちも変わらないと思うのです。なので、まずは自分の身近なところから思いを形にしていくということで、例えば学校でバケツゼリーをつくりたいと言ったら、絶対だめだと言われると思うのです。でも、バケツゼリーができないまちはきっと将来的に住みたくないまちだと思います。バケツゼリーが応援できるぐらいのまちでありたいなというふうに思い、バケツゼリー大会とか、そういう小さなところから始めていくようにしています。

この流れから、例えば、ここに意外と留学生が来たりとかするので、留学生と一緒にトントン相撲大会をやったりとか、たまたま高校生の女の子と話していたら、メイクの仕方をしっかり教わったことがないということで、地元の商店街の方に化粧品屋さんがありますので、そこをお願いをしてメイク講座をやっていただいたりとかしています。

あとは月に1回、「ホッとな食卓プロジェクト」というのをやっています、このホッとな食卓プロジェクトはもともと、東京都の世田谷区に野毛青少年交流センターがある

のですけれども、そこで実施しているプロジェクトから名前をもらってきて、ここで実施をしています。

これは何かというと、月に1回、一緒にみんなでご飯をつくって食べるというだけなのですが、この拠点を開いて、もともと地域交流の拠点としてここを設置したのですけれども、ここを設置して気づいたことは、いわゆる今まで静岡市の若者会議とか、他の今まで関わってきた中高生というのは、こういうプロジェクトをやるから、よかったら参加しなにかみたいな募集をして参加してくる中高生だったのですが、いわゆる活発な中学生とか高校生が参加していました。

ただ、ここの拠点を開いてから、場所として持つと本当にいろいろな中学生とか高校生が来まして、その中で一番感じたのは、こんなにも子供の貧困が身近にあるのだなということでした。

例えば、ここに来ている高校生たちと話していると、まちづくりのプロジェクトとかをやる以前に、自分の生活が全く満たされていない状態だったりして、要するに、自分が安心安全な環境にいないのに、まちのこととかに関心を持ってと言われても難しいだろうということで、そういったところから僕らもサポートしていかなければいけないということで、一緒にこのプロジェクトをやったりとかしています。

僕らとしては、まちづくりとか地域参画ということを最初に考えてこの拠点をつくったのですが、実際に地域の高校生たちと関わっていくと、そういうことも一緒に考えていかなければいけないと、肌身に感じたところです。

今、私たちがやいばるの中で一番力を入れている活動は、地域の中での部活動です。

今、部活動もいろいろ問題が出てきていると思いますが、地方の高校とか中学ですと、まだ焼津市はそれほどでもないのですけれども、例えば学校の運動部がサッカー部しかないとか、野球部しかないという状況があります。要するに、人数がいらないから野球部とサッカー部とバスケット部とつくれないのです。そうなってくると、高校生が放課後活動で自分がしたいことができないということが起こっていて、こうやって人口が減っていくのであれば、高校とか中学をごちゃまぜにして、一緒に地域の中で部活動をやっていくというふうにしたらどうかというのを、焼津市に提案をして、その1つの実験として、地域の中で展開する部活動をやっています。

ここでサッカー部とか野球部とかをつくると、今ある既存の学校ともめたりすることもあるので、実際に中学生とか高校生の話を聞いていたら、サッカー部はやりたくなくて、釣り部がやりたいと。港町なので釣りをやっている高校生がいたりとかして、釣り部がやりたいという話だったりとか、写真部がやりたいという話だったりということで活動しています。

地域の中で部活動をやってみて、すごくおもしろいなと思っているのは、例えば釣り部をやったことによって、地元の学童から釣り教室をやってほしいと依頼があったりだとか、今、釣り部は、地域の中の釣り名人の人が顧問になってくれて、月に1回釣りをやっ

ます。そこで地域の方との出会いが起こっているのは、1つのおもしろい事例になっているかと思います。

昨日もやっていたのですけれども、最近は英語部ができて、英語部は地元の高校とか中学に来ているALTの先生が顧問をやってくれています。

これは余談かもしれませんが、ALTの先生が中学校とか高校に配備というか、そこに勤務しているのですけれども、ただ、ALTの先生たちからしたら、もっと日本の高校生とか中学生と交流したいと。しかし、授業の中で関わられる時間はすごく限られていますし、授業の中でコミュニケーションをとるといよりは、それは彼が言っていたことなのですけれども、「僕らはまるで英語をしゃべられるマシーンになっているみたいだ」と言っていて、1対1で生徒と話したりするような時間がなかなか持てないということをつまみ聞いて、それだったらここでやってくれないかということで、もともとは月に1回でいいと言っていたのですけれども、「私はもっとやりたい」ということで、今は週に1回、毎週ALTの先生たちが来てくれて、もちろん無料で中学生とか高校生向けの英語部というのをやっています。

英語部を開いておもしろかったのは、英語とか勉強に関することだと、割と進学校の子のほうがアンテナが高い感じがするのですが、ここの施設の中で英語部を毎週毎週やっていたら、最初はやはり真面目そうな雰囲気があるので、いわゆる総合制の学校というか、就職をそのまましていくような高校生たちは余り興味を示さなかったのですけれども、ただ、気持ちとしては英語を話したいという気持ちはあったので、2、3回続けていたら、気づいたら参加していて、それもやはり1つ機会を奪っているなと僕は思ったのですけれども、要するに、勉強イコール進学校がやるものみたいなイメージがあって、語学とかいうのは別に総合制の学校に行っている子たちは自分で、私には英語ができないという自己肯定感をなくしてしまって、そこで機会を失わせてしまっているのかとされていて、それを開いたことによって、そこに参加するということが起こったのは1つおもしろいなと思っています。

あとはいろいろなプロジェクトをやっていくということで、若者がつくる音楽フェスというものをやったりですとか、これも高校生とか大学生が企画をして、4,500人ぐらい来場しています。

こうして1年ぐらい活動してしましたら、今年度ぐらいから地元のほうからいろいろな依頼が来るようになりました。例えば、近くの幼稚園から、幼稚園のPTAもかなり数が減ってきていたりだとか、多忙化が進んでいるというところで、ただ、夏祭りを企画しなければいけない話があって、高校生たちが前にお化け屋敷を企画したこともあったので、お化け屋敷ができないかという話がありました。一緒にお化け屋敷の企画を、幼稚園のPTAが関わってやったりですとか、あとはこれは焼津市がたまたまなののですけれども、デンマークのフォルケホイスコーレという市民大学なののですけれども、修学旅行で毎年焼津に来るのです。なので、焼津に来る修学旅行と合わせて、高校生と一緒にアート活動をするという

ようなものをしたりですとか、あとは地元のお祭りに出店してほしいという依頼がありました。一緒に子供向けのブースですけれども、いわゆるスーパーボールくじとか、お菓子のつかみどりとかを高校生とか中学生が企画しました。こちらの写真に子供たちがたくさんいると思うのですが、子供たちに対して提供するというようなこともやっています。

私たちのやいばるの大きな特徴は、自分たちのことは自分たちで決めるということを徹底してやっています。なので、ここの最高意思決定機関は利用者会議という、ここの若者たちによる会議です。

この会議の中で予算分配も全部決めてもらっています。これは焼津市と僕がかなり交渉して、ただ、僕らとしては委託費をもらう中でどういうふうに使っていくのかというところで、市としても本当に高校生たちの意思決定で大丈夫なのかという話があったのですけれども、しっかり高校生ができるように、今は高校生たちが話してやっています。

例えば、先ほど部活の紹介もさせていただいたのですけれども、部活になるための要件も全て高校生たち、中学生たちが決めました。例えば、3人以上でないと部活になれないとか、1人は顧問をつけなければいけないとか、部活になると予算が幾らつくとか、ただ、予算の上限額は決まっているので、その上限額を高校生同士が議論して、お互いに分配していくということをやっています。

最初に何か見積もりというか、これぐらい予算がかかるというのをみんな出して、その中で、その予算は別に要らないのではないとか、それだったら地域の誰かからもらってこられるのではないとか、いろいろ議論して予算の分配をしています。

私たちの施設は、基本的に中学生、高校生のサポートを大学生がするという仕組みになっていて、ただ、先ほども言ったように、地元の子供の貧困とか、割としんどい子が来たりだとか、課題を抱えているような子も来ることが多いので、大学生がそれを真剣に聞いていると、大学生もしんどくなってきてしまうということもあるので、地域の大人の方に、大人サポーターになっていただいて、高校生たちの活動をサポートするのと一緒に、大学生の支えもしていただいています。

本当にそれこそお酒の問題だったりとか、たばこの問題というのは日常茶飯事ですし、それを大学生が、本当にどうしようというふうになるのを、元学校の教員をやられていた方とか、いろいろな方に来ていただいてやったりしています。

昨年度は、実は、試験事業として行っていましたので、週2日間の開館日しかなかったのです。なので、火曜日と金曜日だけ開くような状況でやっていたので、なかなか周知とか、例えば水曜日に来たのにやっていないではないかみたいなこともあったのですけれども、最終的に1年間で900人ぐらいの中学生とか高校生が訪れてくれまして、あとはおもしろかったのは、こういう若者の拠点というふうにすると、割と地元の中学生とか高校生が多いと思うのですが、それだけではなくて、割と県外からも学生が来るというような動きがありました。

彼らは何のためにここに来ているかという、自分たちのまちにもこういう場所をつくりたいというので見に来てくれました。

なので、僕は今、東京と石川県の金沢市でこういう拠点をつくりたいという高校生と一緒に、どのように拠点をつくっていけばいいのかというのも入らせていただいて、一緒に作るようなお手伝いもさせていただいています。

この拠点ができてから、学生団体が1つ発足しまして、やいばるとは別で大学生たちが自主的に活動を始めたいということで、コミュニティカフェをつくるという大学生たちが学生団体を発足しまして、先週オープンしました。

これもやはり大学生がこういうことをやりたいと言ったときに、それを実現できる地域でありたいということがありましたので、この「やりたい」というのを聞いたときに、すぐにどこかいき空き店舗がないとか、空き家がないかみたいなことを地域のいろいろな方と話してつなげたりだとか、実際にカフェとかお店をやられている方をつなげて、どういふふうに許可をとればいいのかみたいなことをいろいろ相談させていただいて、今もつくっています。

ただ、彼女たちも実は焼津市の出身の子は1人で、全部で10人ぐらい学生団体のメンバーがいるのですが、9人は全部市外のところからわざわざ来て、ここでやってくれています。

まだ、なかなか周知がうまくいなくて、この前ちょうど話をして、オープンして1日目で早速赤字が3,000円出たという話をしていたのですが、これも1つの勉強だなと思っています。要するに、カフェをやりたいと思って、ずっと悶々としていても永遠にできないわけで、実際に声を出して、それができるといふふうになって、3,000円赤字になったら、誰かに今度相談して聞いてみようというのをちょうど昨日やっていました。飲食の経営をされている方に、こういうふうになったのですけれども、と相談するといふふうになっていて、まさに若者が地域を編み直すといふか、若者が地域の人たちをつないだりとか、地域で若者を育てていくといふか支えていくといふのはこういうことなのかと思っています。

私たちの施設も非常に小さいですし、私たちがやれることも小さいと思っているので、いかに地域の中で若者の支えをしてくれる人を増やすかということが重要だと思っています。人と人を結ぶ「むすびCafe」という名前で、おむすびを売っています。

私たちがやいばるで目指していることは、先ほども言いましたが若者の「やりたい」を地域の中で実現する拠点であるということです。地域の中というのは僕はすごくこだわってやっていることです。要するに、拠点の中だけで実現しても意味がないと思っています。拠点の中だけではなくて、地域で実現していくといふことが、地域の人と関わったりすることでそれが地域への愛着になったりだとか、地域に対しての誇りになったりといふのがあるかなと思っています。

もう1つは、民主主義の実践の場であるということも非常に重要であると思っています。

なので、僕自身の勝手な特徴だと思っているのですけれども、この活動をいろいろなところで講演させていただいたりするのは、まちづくりの文脈でも多いのですけれども、もう半分ぐらいは主権者教育とかの文脈でも呼んでいただくことがあります。私自身は日本シティズンシップ教育フォーラムという主権者教育とかシティズンシップ教育の全国ネットワーク組織がありまして、今はそこでも運営委員をさせていただいてまして、そういった文脈、要するに、シティズンシップ教育という文脈で若者の居場所というのを見ているというのは余りないのかなと思っています。ただ、僕はすごく親和性があるものだと思っています、そこをどうつないでいくかというのも自分の役割だと思っています。

あと、自分と地域の循環を通して、自己発見できる場所というのもすごく大事だと思っています、中学生とか高校生の頃は、どういうふうに生きていけばいいとか、将来どういふふうになればいいとか、すごく自分に悩む時期だと思うのです。

僕もそうでしたけれども、中学生のときに教室に『13歳のハローワーク』という仕事をたくさん紹介している本があったのですが、それを読んでいても自分はなかなか見つからないのです。しかし、地域の方といろいろ話したりだとか、自分で実際に活動してみると、自分はこういうことが好きなんだとか、こういうことが得意なんだとか、こういう生き方をしている人もいるんだみたいな、出会いを通していくことで自己発見につながっていくというのがあると思います。

僕は若者に対しての効果だけではなくて、地域に対しても効果があるのではないかと考えています。それは若者が地域を組み直すということです。

これは1つの効果ですけれども、若者が1つの方向に、これをやりたいというふうに向かっていると、地域の方がすごく応援をしてくださっています。例えば、写真部でフォトコンテストをやったのですけれども、それも全部地元の企業に、協賛品を出してくださいというのを大学生がお願いしに行くと、何社か出してくださったのですけれども、そういったことが起こったりだとか、あとは地域の組織というのは結構、商店街や地域と関わっていると、人間同士の難しい関係性があったりするのですけれども、若者が応援してほしいとお願いをしたりだとか、若者のためとなると、絶対に名前が並ばないような組織や個人と一緒に後援を出してくれるとか、協力を出してくれるみたいなことも起こっていて、これは子供とか若者がいることで、まちが方向付けられるというか、子供とか若者のために頑張っていこうというふうになると考えています。

今、私たちが5年後までに実現したいと思っているのが、5年後までにこの「若者ぷらっとホーム やいばる」のような拠点を市内に9カ所つくりたいと考えています。寄付金を集め、拠点をどんどん増やしていくことで、地域の中のネットワークをどんどんつくっていこうと思っています。

こういった流れで、私たちのほうで提案させていただいているのが、この日本ローカル・ユースカウンシルプロジェクトで出てきた『わかものまちなつくり方』です。今「若者ぷらっとホーム やいばる」で実現しているものは、若者の思いを形にしていくという

ころで、もう少し政策提言に踏み込んだようなところまで若者の思いを形にしていったりだとか、声を形にしていくことができないかということを考えてみました。

それを考えてみましたら、スウェーデンにユースカウンシルが設置されていて、これはスウェーデンの第2の都市のヨーテボリで行われているユースカウンシルですけれども、ウォータースライダー祭りを若者がやりたいと言ったら、それを実現したりだとか、これは実現していないですけれども公共交通機関の無料化を提案したりしています。

いわゆるユースカウンシルというのは、若者議会、若者協議会、若者会議と日本の中で訳されているものです。私たちは、若者が自分たちで自分たちのまちをつくるための仕組みと考えています。

いわゆるヨーテボリとか、日本の中でも最近だと愛知県の新城市が予算を1,000万円つける若者議会というのが、この本の中でも13ページで、新城市とかはすごく積極的に取り組んでいるのですけれども、いわゆる新城市とかヨーテボリのように、自治体が若者の声を聞こうとする姿勢のまちはいいですけれども、それ以外のまちもたくさんあるわけで、そこに住んでいる、要するに、それ以外のまちに住んでいる若者たちは、自分たちの声をまちに届けることができないという状況が、僕は1つのまちに参加する権利の問題として、このままではいけないのではないかと思います。若者が自分たちの力でまちに対して声を届けるためにどうすればいいのかということのをまとめたのが、この『わかものまちなつくり方』という本です。

これを考えていく過程では、全体のアドバイザーで、放送大学の宮本みち子先生に協力をいただいたりですとか、検討委員で子供の権利とか、スウェーデンの若者政策の研究とか実践に携わられている皆さんと、1年半ぐらいいろいろ検討を重ねて、ハンドブックを構成してきました。

ハンドブック自体は皆さんのお手元にありますので、もしよければそれを見ていただければと思うのですけれども、自分たちの力でまちをどういうふうにつくっていくか、自分たちの思いをどういうふうに形にするのかということ、STEP 1 からSTEP +  $\alpha$  までまとめています。

これをより広げていこうということで、ちょうど今年の7月に「スウェーデンから学ぶ、わかものまちなつくり方」というフォーラムを全国3会場で実施させていただきまして、静岡、京都、東京の3カ所で実施をして、ここに実際にスウェーデンでユースカウンシルの活動をしている15歳の男の子と女の子と、あとはユースカウンシルのコーディネートをしているユースワーカーの方に来ていただいて、その3人をゲストに招きながら、静岡、京都、東京という3会場をめぐりめぐって、実際に静岡と京都と東京の会場には、それぞれのまちで若者参画に関わるような活動をしている日本の若者たちも一緒に来てもらって、どのようにわかものまちなつくりかということを考えていきました。

今、私たちのプロジェクトでもう1つ始めているのが「わかものまちなつくり方」という「子ども・若者参加政策と実践のためのポータルサイト」というものを、実はまだこ

れはつくっている途中なのですが、今、オープンさせていまして、ネットで検索していただければ見ていただけるようにはなっているのですけれども、まだ記事が少ないので、これを増やしていくつもりです。

いわゆる若者参加政策とか実践というのは、いろいろなまちで若者たちが、私たちのセンターに金沢からわざわざ来てくれるぐらいなので、みんなどういうふうにすればいいかというのは、若者たちも困っているということがわかってきましたので、このポータルサイトにまとめたかどうかということで、今、準備をしています。

もともとユースカウンスルに注目をしたのも「子ども議会」「若者議会」というものが日本にたくさんあるなというところから始まりまして、現在、集計をしているのですけれども、私は早稲田大学の卯月盛夫先生の研究室に所属しているのですけれども、卯月先生の研究室と、私たちのNPOの共同調査という形で、全国の自治体に対して「子ども議会」と「若者議会」の一斉調査をかけました。

「子ども議会」「若者議会」の実態がどうなっているのかということは今、調べていまして、年内には公表できるかと思っているので、また共有させていただければと思っています。

なぜ、ユースカウンスルとか「子ども議会」「若者議会」に注目したかという話なのですが、いわゆる若者参画とか子供参画という、ヨーロッパとか他の国が参考にされることが多いかと個人的に思っていました。しかし、実際に調べていくと、実は、日本も戦後の民主主義教育の流れで「子ども議会」を設置していたという記述がありました。

研究っぽくなるので今日は余り長くその辺はお話ししませんが、例えば東京の台東区にも「子ども議会」があったという記述がありまして、その中を全部さかのぼっていくと、上野動物園にインディラというゾウがいたのですけれども「子ども議会」の提案からゾウのインディラを連れてきたという記述がありました。そのストーリーもすごくおもしろいのですが、要するに、日本の子供参画というのが「子ども議会」をスタートに、戦後にあったというのを発見した。何でそれが日本の中で今、定着せずに進んできたのか。

とはいえ「子ども議会」とか「若者議会」というものは、全国で調べていますけれども、実施しているとか、過去に実施していたという自治体は7割ぐらいあるのです。ですので、6割から7割ぐらいの自治体が「子ども議会」を持っていて、それがどういうふうな現状としてあるのかという、戦後からの歴史をさかのぼって考えていくというワンステップとして、この「わかものまちなつくり方」を提案させていただいているという形です。

時間がなくなってきたので、最後にまとめに入りますが、私たちが子供・若者の地域参加ということを考えるときに、いわゆる子供・若者が育つということだけではなくて、いろいろな視点から子供・若者の参加ということを捉えていきたいと思っています。

私たちが最終的に目指していきたいと思っているのは、人口減少でも、地域がどうやったら持続可能になっていくかということですので、地域の持続可能性を目指していきたいとなったときに、子供・若者の参加というのが、子供・若者のシティズンシップを育てて



いくということ、若者のシティズンシップを育てていけば積極的な市民が増えて、積極的な市民が出ると子供・若者の自発的なまちづくり活動が増えるだろうと。

それだけではなくて、子供・若者のシティズンシップというものを育てていくと、地域に対しての誇りとか愛着とかいうのが育っていったら、若者の定住欲とか定住率みたいなものも強まっていくのではないかと、あと、私たちが実際に活動することで多世代の地域参加も子供・若者の参画で生み出されてきた。そこから多世代のつながりとかコミュニティみたいなものが創出されて、市民社会の質がどんどん上がっていくことで、地域の持続可能性が上がっていくのではないかと、いろいろな回転というかサイクルがあるのではないかと考えています。

そう考えると、やはり目指すべき参加というのは、意思決定段階への参加というものを目指していかなければいけないと僕自身は思っています。というのは、やはり形式的な参加であったりだとか、おままごとの参加みたいなものであると、先ほどの子供・若者の参画のサイクルが回っていかないですし、いわゆる今までの、先生から始まるまちづくりと全く変わらないと思っています。

なので、それをスタートさせていくというところから「私」からはじまるまちづくり」というのをすごく大事にしていまして、私に近いところからどんどん広がっていくということを考えています。

実際に、やいばるに来ている中学生とか高校生を見ていて、1年とか2年とか関わっていると、最初はバケツゼリー大会から始まったのですけれども、そこから今はまちづくりのプロジェクトを始めたりだとかして、要するに、どんどん自分の関心とか社会の幅が広がってきているような感覚を受けていますので、それをどのようにつくっていくかということが重要だと思っています。

とはいえ、この子供・若者参加を考えていくときに、いろいろ課題があるなと思っています。例えば参加をどういうふうに開いていくのか。どうしてもセンターとか若者会議みたいなことをやると、そこに参加するのは一部の若者だけになってしまうので、これをどういうふうに広げていくのか。

例えば欧州を見れば、直接的な参加だけではなくて、今はICT、e-participationと言って、オンラインを使って子供・若者の意見を聴取するみたいな仕組みも出てきているので、間接参加も考えていかなければいけないとか、参加のコーディネーションをする専門性みたいなことも必要だと思っています。やはり子供・若者の声をストレートに伝えていくと、大人がなかなか言葉として理解できないというところがあると思います。それをしっかり、子供たちが本当に言いたいところの背景を酌み取って言える大人が間に入って、地域とつないだりしながらやれるような専門性がある人をどういうふうに育てていくのかということであったりだとか、あとはステップバイステップの参画をつくっていくかということも必要だと思っています。最初は個人的な問題意識かもしれないですけども、どんどん公共に開いていくような、社会に開いていくような参加の枠組みというものをつくっていくか

ばいけないと思っています。

このやいばるのように、制度設計とか場づくりのところから参画していくというのは時間もかかって大変だということで、制度設計から始めるのか、プログラムから始めるのか、プロジェクトから始めるのかというところもあると思います。

人口減少時代の子供・若者参画のまちづくりの意義というか、なぜ必要なのかというところで考えているのは、UIターン支援というのは手遅れだと思っています。要するに、UIターンをする前に、高校生とか中学生の場合、大体、高校生で進路選択をして、都内の大学に出てくるというケースが多いと思うのですけれども、その前から地元のことを知ったりとか、愛着を持ったりとかしないと、高校生とか中学生は全然地域に関わらないので、そこからもう出てしまったら手遅れというか、東京に行っても、地元のことを何も愛着がなかったらもう戻ってこなくなるのかとっていて、やはり早い段階から参画するということが大事だと思っています。

そういう意味で、本当の成果が出るのは10年後だと僕らの活動は思っていて、人口減少社会だからこそ子供・若者の参加を進めていかなければいけない。それを進めていく上で、ただ、子供・若者の参加というものをイベントっぽくとか、見せ物っぽくやるのではなくて、子供・若者の市民としての権利がベースにあるということを前提にしながら進めていかなければいけないと思っています。

なので、僕はよく「ピーター・パンの世界からの脱出」と言っていて、子供・若者の参画というのが、要するにネバーランドだけではなくて、そこから脱出して、現実社会への参画にどういうふうにつなげていくかが大事だと思います。

いわゆる消滅可能性都市というふうに今言われるのですけれども、これからも長く生き続ける子供・若者が、自分たちの未来を自分たちでつくることのできる社会になれば、未来の発展可能性都市になるのではないかと今は考えて、若者のまちづくりというものに取り組んでいます。

それでは、以上で僕のプレゼンを終わりたいと思います。ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。

最後にまとめて質問の時間をとりたいと思いますが、この時点で何か土肥先生に特に御質問をしたいという方があれば受けたいと思います。

○参加者1 街中に飛び出そうといったことを、示唆を受けてそうしたということでしたが、誰からどういった場でそういった示唆を受けたのですか。

○土肥氏 そうですね。もともとこの活動自体に、全体でアドバイザーに4名入っていただいています。静岡県立大学で学長をされている鬼頭宏先生という歴史人口学の先生とか、特に鬼頭先生から示唆をいただいたのですけれども、これを運動にしていかなければいけないと鬼頭先生からアドバイスをいただきまして、一部の若者たちが勝手にやっているということではなくて、若者たちの総意みたいな形で、運動体として、事業型というよりは、実際にまちを変えていく枠組みとして活動を進めていかなければいけないと御提案

をいただきまして、そのように活動していったという経緯があります。

○参加者1 ありがとうございます。

○司会 ほかによろしいでしょうか。

○参加者2 今日はどうも、お話を伺いましてありがとうございます。

簡単で結構ですから教えてください。若者の参加に意思決定段階の参加が大事だと最後のほうでおっしゃいまして、私もそのとおりでと思うのですけれども、そこで言っている意思決定というのは具体的に何を。まちづくりだとは思っているのですけれども、どういうことを。

意思決定と言ってもかなり公のものから、もっと身近なものまでいろいろあると思うのですけれども、どのぐらいのレベルのことですか。

○土肥氏 僕は全ての段階において大事だと思っていて、例えばスウェーデンの話を聞いて、スウェーデンの若者議会をやっている若者たちに、何でこんなに、そもそも何でユースカウンシルのメンバーになろうと思ったのかということを知りましたら、それは自分たちが社会に対して影響を与えたいと思ったからだと答えたのです。

どういうところで今、自分が影響を与えられていると思うかという話を聞いたら、例えばスウェーデンには給食会議というのがある。いわゆる生徒会みたいな形で給食委員が選ばれて、日本だと給食委員は配膳係なのですけれども、そうではなくて、給食のメニューを何にするのかということスウェーデンでは、15歳ぐらいの子供たちが話し合って決めている。僕はそれを聞いたときに、なるほどと思ったのです。というのは、そういう身近な、私的な問題ですね。すごく身近なところでの意思決定というところの連続性の中に、若者議会とかまちへの参画というのが開かれているのだと思ひまして、何か私たちは勝手に大人が決めてしまっている部分を、いかに若者に開いていくかとか、開ける余地があるのかみたいなことを考える必要があるのかと思っています。

○参加者2 ありがとうございます。

○参加者3 よろしいですか。今日はありがとうございます。

1点だけ伺いたかったのですけれども、1994年に日本が批准している児童の権利条約がございますね。まさにそこで子供の参加の権利がうたわれているところで、98年に報告書が出ていて、ちょっとつかれているところがまさにここだったと思うのですけれども、そういうところを意識した取組だとか、あと、子供たちは認知というものをどういうふう to 受けとめているのか、また、それを向上させるような取組というのを伺いたく思います。

○土肥氏 子供の権利というものをということですか。

○参加者3 そうです。参加の権利ということですか。

あとは注目度についてという、一般的な世界での取組の中でどれだけ日本が取り組んでいるかという部分についての認識というのか、その情勢について。

○土肥氏 そうですね。いわゆる子供の参加に関する、例えば子供の権利に関する自治体も、条例設置をしている自治体も幾つかあると思うのですけれども、今回もこの本をつく

るときに子供の権利の研究者の方にも一緒に入っていてつくったのですが、やはり今までスローガンとして終わってしまっていたみたいなどころがあるかと思っていて、それをどのように実体化させていくかというのがこれからの段階になっていくのかというふうに僕は思っています。

それを子供たちに対してどれぐらい認識させて、そういう周知をするような活動をしているかどうかというところは、実際、今のところはそういうことはしてなくて、この中にはもちろんまちを変える権利が若者にはありますということが、そういったところではもう何回も書いてあるのですけれども、法律ベースのところでは余り言わないようにしています。

どうしてかということ、結局、学校の授業では子供の権利というものを学んではいると思うのです。ただ、やはりそれが学校の中で実現していないというのが現状として思うので、法律の話をしてでも生徒たちの中に入ってこないという感覚があるかと思います。

国際的な情勢というところを短くお話しさせていただくと、例えばこれをつくるときもいろいろな方に協力をいただいたのですが、千葉大学で子供の参画に取り組まれている木下勇という先生がいらっしゃるのですが、木下先生と話をしていたら、今はアジア圏のほうの子供の参画が活発に進んでいるという話を聞きまして、例えば今、インドネシアは全ての自治体に子供会議が設置されていたりだとか、僕は去年の3月に韓国に行ってきたのですけれども、ソウル市も若者議会を設置をしまして、そこから若者向けのベーシックインカムみたいな政策を実現させたりですとか、日本はこれからどうなっていくのだろうというのを、僕はそういう話を聞きながら思って、日本だと、ヨーロッパで進んでいることでしょう、みたいな感覚があるのですけれども、アジア圏が進み始めたら人ごとではないかなというような気持ちは思ったりしています。

○参加者3 ありがとうございます。

○司会 よろしいですか。

それでは、また最後にもう一度、皆さんにお伺いする時間を設けたいと思います。

ここでパワーポイントの交換等をいたしますので、3分間だけ休憩ということにさせていただきます。

15分から再開したいと思いますので、一旦休憩にさせていただきます。

(休 憩)

○司会 それでは、お時間になりましたので、後半にまいりたいと思います。

後半ですが、あおもり若者プロジェクトクリエイトの久保田圭祐先生からお話を伺いたいと思います。

それでは、久保田先生、どうぞよろしくお願いします。

○久保田氏 あおもり若者プロジェクトクリエイト理事長の久保田と申します。本日はお時間をいただきまして、私どもの活動と、その活動から見てきた地域を担う人材の育成に関して、少しお話しさせていただければと思います。

まず、私どもの活動は「クリエイトまち塾」と申しますが、この活動に関してわかりやすく映像でまとめたものがございますので、そちらを御覧いただければと思います。

(ビデオ上映)

最後のほうにネタばれだったのですが、競輪の補助を受けましたので広報用の動画をつくっていただきました。

そういうことで、こういった取組を青森でやっております。クリエイトまち塾は5年目、クリエイトは今年で10年目となります。

改めまして、私はあおもり若者プロジェクトクリエイトの久保田と申します。青森に生まれ、高校まで青森におりまして、その後、慶應義塾大学の総合政策学部に入學して、東京にやってきました。

その後も延長戦ということで、同じ大学の大学院で政策・メディア研究科の修士課程におりまして、修了しました。

現在は、一応、大学院も終わりましたので、都内の広告代理店で働いて、そういう仕事をしつつ、青森でも活動をしてということでございます。

まちづくり活動団体クリエイトを高校2年生のときに始めて、今年で10年目となりました。

クリエイトの御紹介ということで、私たちの活動は若者が主体となった地域づくり団体です。そもそも、この若者が主体となった地域づくり団体クリエイトがどのようにしてできたかといいますと、私が高校3年生のとき、2010年に東北新幹線が全線を開業いたしました。その前に、東北新幹線がいよいよ県民の悲願で開業するというニュースが3年ぐらい前から地元のニュースで毎日のように流れて、いや、このままだったら開業に対応できないのではないかと不安をおおるようなニュースが流れて、それを見てまんまと乗せられて、私は2010年12月の東北新幹線新青森駅開業に、地元が開業しても観光客のおもてなしであったりとか、地域の受け入れが対応できないのではないかと、高校1年生の久保田少年は幼心に思ったわけでございます。

そこでふと思ったのが、青森には魅力的な観光資源があるけれども、それに気づいていないだけだと思って、それを自分たちで見つけ出して、磨き上げて、発信していこうという、そもそもはそういう始まりでクリエイトという団体をスタートさせました。

2009年4月にこうやって活動を始めたわけです。

いろいろな人のつてを使って、住宅街のアパートに事務局を設置しまして、いろいろな人をお願いしたところ、ぼろアパートを月5,000円で貸しますということでお借りしまし

て活動して、地元の情報を発信しようということで、こういう形でラジオ放送、インターネットラジオを使って情報発信とかをしていたのですが、まさに順風満帆な活動かと思いきや、アパートが古過ぎて、耐震性の問題ですぐに取り壊されることが決まって、活動場所がなくなってしまいそうになるわけです。

そのときに、一緒にやっている仲間とともに市役所に行って、新たな活動場所はないですかねと相談しに行ったところ、こういうときはということで商店街関係者を紹介され、そうしたら商店街の中にフリースペース、空きスペースみたいなのがあるということで、そこをお借りして観光情報の発信の活動を続けることができるようになりました。

それ以来、クリエイトの活動の拠点が商店街に変わって、その後も商店街で活動して今に至っております。

私たちの活動が、私が高校時代に立ち上げた活動でもありますので、大切にしていることというのは高校生が主体であるということです。土肥さんも先ほど主体性であったりとか「“私”からはじまるまちづくり」とおっしゃっていましたが、私たちの活動もまさにそのとおりで「三人称の提言より、一人称の実践」というスローガンで10年間活動を続けています。

続きまして、クリエイトまち塾の紹介です。先ほど映像でもお見せいたしました。

こちらの活動は商店街を学校に見立てまして、実践活動で経験を得て、先ほどの映像にも流れていましたが、月に1回高校生が集まって、コアプログラムと言っているのですが、みんなが集まって講義を受けたり、ワークショップを行ったり、ホームルーム活動。商店主と一緒に集まっての活動を通じて知識やネットワークを得る。地域を知って、視野を広げていこうという活動をしております。

ホームルーム活動をもう少し詳しく説明してみますと、高校生が今、全体で30名おりますが、6～8名ほどでクラスを編成しまして、それぞれのクラスに担任として商店主の方を配置いたします。事務局との連絡役、コーディネーターとして地元の大学生を副担任に配置して、この体制で1年間同じメンバーで集まって、まちづくりの活動をしていくという仕組みになっています。

これは写真でお見せいたしますと、こういうふうにまち塾のホームルームを行っておりますが、手前が商店主、後ろが大学生。高校生がこの日は2人でしたけれども集まって、商店街のことを教えてもらったりとか、あとは自分たちのアイデアを提案したりとか、あるいはさまざまなフィールドワークに出かけています。

まち塾のコアプログラムの活動をもう少し詳しく紹介いたしますと、月に1回集まるこの活動では、講義あるいはワークショップを行っております。1年間のテーマがあるのですが、今年度のテーマは「海とまちづくり」というテーマで、昨年度は「商店街が社会を変える方法」という、去年はテーマが壮大過ぎて難しかったのですが、そういうわけで毎年テーマを設定しまして、そのテーマに沿ってレクチャーを受けたり、あるいはワークショップを受けて、狙っているところは日々の商店街での活動を学びに変換できればと。話を

聞く中で、もしかして活動する中で、ああいう経験があったけれども、それはもしかしてということで、それを学びに変換できればという思いでやっております。

先日は角田誠さんというコピーライターの方に登壇をいただきましたが、左側の写真は、私の大学院時代の指導教員でもあって、今、文部科学省の大臣補佐官をやっている鈴木寛先生が、高校生に社会における幸せの定義をテーマに充実した御講義をいただきました。

右側がワークショップです。高校生にワークショップ運営をお願いすることも多くて、これは映像の中でもありましたけれども、クリエイトの中で、まち塾の中で、高校生が自主的に集まって高校生カフェというものをやっております、そのメンバーが高校生に、イベントとかで高校生カフェを出店する際はメンバー全体で対応しますので、コーヒーの入れ方をレクチャーするワークショップを行いました。

そして、ホームルーム活動ですね。先ほど申し上げたとおり、参加者数名に1人ずつ商店主を配置して、1年間、一気通貫して活動を支援しています。

その1年間の活動の1つのポイントというのが、この1年間の活動の最終成果物が、商店街の活性化に向けた企画提案を年度末に行うことになっております。それに向けて大体、今年もですけれども12月に中間発表会。クラスごとに1年間、半年間、こういう活動をしてきましたと。そういう活動で、こういうことを感じました、思いましたと。そして、その考えたことをもとに、こういう企画を考えていますということで中間発表してもらい、その考えたアイデアをよりブラッシュアップする1泊2日の合宿を1月末に行っています。

この企画提案を1年間の中でどういうことを狙っているかということ、1年間の活動の総括を企画提案という形にしてもらうことで、商店街活性化、地域活性化を自分事化するということです。

企画提案というのは条件が幾つかあるのですが、その中の1つが、あくまでも来年度、自分たちが実施する企画、実施したいと考えている企画ということです。こういうことをやってくださいと誰かに提言するのではなくて、自分たちはこういう企画をやりたいですということを提言してもらう。ここに一人称のまちづくり、一人称の実践というエッセンスが入っております。

年度末には成果発表会を行って、この中で企画提案の審査を行います。高校生が主体となった商店街の活性化の企画を提案してもらい、最終発表はいろいろな地域の関係者であったりとか、一般の方にも参加していただいて、誰でも入れるような形にしております。

左側の写真が昨年3月です。ここは定員が80名ほどの会場なのですが、それもいっぱいいっぱいになってきたので、今年の3月からは会場を広くして、右側の写真、こういうホールで発表会を行って、それほどいろいろな人に年度末、いろいろな人の前で高校生が発表する。それも1つのいい経験になっているかと思っています。

その活動で生まれた企画、まち塾で生まれた企画を翌年度実践していくということになっていきます。

そのホームルーム活動を1年間かけて活動もしますし、企画提案できっと大変な思いも

するわけですが、1年間を終えて、左側で記念撮影をして、充実した表情だったりとか、あとはこのまち塾を卒業して今、大学生、社会人になった方たちも成果発表会には駆けつけたりとか、日々の活動に駆けつけて、積極的に活動を見学したりとか、参加してくれています。

コアプログラムで得たつながり、月に1回の活動で得たつながりを生かして、翌年度、その企画を、月に1回ということではなくて、随時商店主と連携しながら活動を実施していくという形になっています。

左側の写真は一昨年度に提案され、昨年度に行われた企画です。中学生に向けて、高校生が商店街のことを教える。中学生版のまち塾をやりたいという高校生の企画があって、それを実際にやって、中学生が参加して、高校生がコーディネートをしたという活動です。

右側の活動は商店街のイベントにブース出展をした準備の様子です。

まち塾の活動は、高校生に対して地域愛着を醸成したり、答えのない問い、地域の活性化や商店街の活性化に仲間と共同して取り組み姿勢を育む。キャリア教育的な価値も期待されるのではないかと。

地域に対しては、商店街に新たな価値。新たな価値というのは、学びの場としての価値、人が集う場としての価値を創造しようとしています。そして、地域づくりの新たな担い手として、それまでは商店主が商店街活性化とか地域を活性化しようとか、大人が地域づくり活動を行ってききましたが、地域づくりの新たな担い手として若い人たちの存在もあるよということで、それを提案する活動でもあります。

今回、お話しするに当たって過去を振り返ってみたところ、これは結構おもしろいなと思ったのは、大体毎年、平均7割の参加があって、結構これも傾向があって、企画提案、中間発表がある12月に参加率が上がって、1月は3年生がセンター試験と重なる、受験もいよいよ佳境というタイミングなので参加率が下がりますが、そこからまた上がっていく。どのタイミングで気持ち的にみんながナーバスになって盛り上がっていくかというのが、傾向として見られる。これはふと思ったものです。

私は大学を出て、延長戦で大学院に行ったのですが、大学院ではこのまち塾の活動を研究のケースとして、自分がやってきた5年間の活動がどういうことだったのだろうかということで振り返ってみました。一昔前に総合的な学習の時間が始まった頃に、まちづくり学習とかまちづくり教育という言葉が一時期はやったのですが、それを今さら引っ張り出してきて研究をしてみました。

参加者が活動を通じて感じた変化として、能力、知識、ネットワークといったことを感じている。

郷土愛や進路変化についても、御覧のように変化が起きている。

実際に研究ということで、保護者や参加者の学校の担任にもお話を伺ってききましたが、例えば根気強さとかストイックさが高くなったとか、あとは積極的になったとか、積極性、主体性、すなわち自分で考えて行動する力が突出して高い。



これはあれですね。最近言われている非認知能力であったりとか、そこにも通じてくる話かと思います。

あとは商店主の変化。商店主も地域を構成するセクターとして、高校生を認識したと。例えば、担任を担ってくれた商店主は、この人はどういう職業かとざっくり言うと洋服屋さんでして、やんちゃな子たちが学ランの裏ボタンを買いに来たりとかするお店で、万引きをする子とかが結構昔は多かったそうなのです。

それで高校生に対して余りいいイメージは持っていなかったのだけれども、あとは職場体験で1日、2日で中高生を受け入れても、商店街にそもそも無関心な生徒が多かった。そういう中で、1年間という長期にわたって同じメンバーで関わっていく中で、こういうことを考えているのだなと驚いたと。店頭でも、店を訪れる子供に対して、対等に1対1の大人として認識、接客するようになったという話がありました。

あとは、他の商店主は、店の前を歩く制服を着た若者が、何を考えているのかわからない「宇宙人」のようだと思っていたが、活動を通じて、この子なりに街を考えているのだなと見直したという、まさに地域の一員だという認識を持つようになったという声もありました。

今回は青少年問題の研究会ですので、結構これは番外編のお話ですが、商店主も意識が変化したということで、一昨年度から担任として、それまでは中小のお店の店主にお願いしていたのですが、一昨年度から百貨店の社員にも協力いただくようになって、デパートの方いわく、自分はいくまでも社員として、企業活動の一員として、一環としてまちづくりに参加していたとのこと。ところが、まち塾の活動を通じて、本来商店街に果たす義理もない高校生が一生懸命に商店街の活性化に取り組む姿勢を見て、考え方が変わった。活動を通じて地域商店主とのコミュニケーションが生まれたとのこと。

例えば、青森ですから毎年8月2日から7日まで青森ねぶた祭があるのですが、ねぶたの時期は結構お客さんがたくさん来て、ねぶた用の衣装のレンタルがあるのですが、同じ担任をやっている他の、先ほどの洋服店が、自分たちのところにお客さんを紹介してくれたりとか、そういう意味では、それまでは一社員として地域に関わっていたのが、本当の地域の一員として自分自身も変化したということをおっしゃっていました。

あとは、別の商店主はお店をリニューアルするときにサードプレイスの重要性を活動を通じて認識したそうで、店舗移転の際にも生かされたということで、お店の中に、何も買わなくても来てもいいよというスペースをつくったり、おしるこのサービスをしたりとか、そういうことをこの商店主はやっているようです。

商店主が活動を通じて感じた変化ということで、これも番外編ですが、商店主に意識変化、行動変容がある中で、特に高校生に対して考え方、見方、捉え方が変化したという声もありました。

活動で、これは一見すると、まち塾というのは高校生に商店主が教えるという活動で、それまで学校で高校生というのは大人から教わる立場だったわけですね。教わる立場であ

った高校生が、地域という未知のフィールドに飛び込み、地域住民と展開していく活動。

師範ではない立場である、学校の先生でもないし、親でもない立場である地域住民、商店主との活動を通じて、この中で教わるという、一方通行の関係性ではなくて、関係性の変化が生まれていると考えています。

具体的には、商店主は地域についての知識を教えて、高校生は高校生で、これは高校生は教えようとして教えているわけではないですが、多様な価値観を商店主に示したりとか、真摯な活動の姿勢を提示することによって、高校生側は地域愛着を醸成したり、地域の実情、それまで景色でしかなかった地域が、実際に関わっていくことで新たな実情であったりとか、ものを知ることにつながります。

また、企画提案の検討を通じて、先ほど言ったように主体性、地域の一員として意識が変化していく、学びの整理がつく、意識が萌芽していく。

こちらは相変わらず番外編ですが、学習者（高校生）との交流を通じて自らの意思を再確認して、彼らは彼らなりに意識変容、行動変容がなされている。

生徒、先生という関係だったのが、お互いにフラットな立場、まちづくりの一員に変化している。

関係性や役割の変化であったりとか「学びあい」、学習者（高校生）の主体性の発揮、商店主は意識変容、行動変容が起きているのではないかと考えております。

最後に、地域を担う人材の育成について少し考えてみますと、引き続き私の研究の中で出てきたものですが、かつて研究されていた「まちづくり学習」や「まちづくり教育」というのは、おおよそこういう図にまとめられまして、学びのプロセスとしては、まちを知る段階、ものを見る目を育てる段階、そして、行動する段階がある。まちを知る、ものを見る目を育てるという段階までは、日々の学校教育であったりとか、数日間の活動であったりとか、短期のインターンシップみたいな活動で得られやすいのだけれども、その後行動するというのが、ここで結構困難な壁があるといえますか、なかなかそこまで行きつくには壁があるということが言われていて、なぜかというと、行動するためには主体性が発揮されないといけない。その主体性を発揮すること自体に困難さがあるのではないかと、これまでは言われてきています。

これはあくまでも、今日ここでお見せしているのは、私たちの活動。これは単一ケースなので、全て完全にどの活動を全国どこでも言えるかという、完全にはそれは言えないわけですがけれども、まち塾という活動を一旦整理してみると、地域住民と高校生の双方向の交流が継続的に行われること、長期にわたる企画と実践が行われることによって、まずは前者のほうで関係性の変化が起き、後者のほうで「学びあい」が生まれる。そして、地域に対する深い理解と能動的な行動が喚起され、主体性が発揮され、行動する段階につながっていくのではないかと。

まち塾の活動というのは、1年間の活動を通じて商店主と一緒に活動し、学び、企画提案というプロセスを通じて、主体者にかかわって、翌年主体的に動いていく、あるいは並行

して主体的に動いていくというプロセスですので、これを図示したものです。

まち塾のような地域での活動というのは、参加者にとってどのような変化があつて、どのようにもたらされるのかというと、まずは得られる変化、学びとしては非認知能力であつたり、地域に対する知識や関心、人のネットワークがあると思います。

それぞれ非認知能力は主体的に実践をすることを通じて、自分事化することによって高まっていった。また、地域に対しての知識、関心というのは、どうしても書物を見て、教科書を見て、雑誌を見てというものよりも、交流を通じて社会との接点ができることによって関心が高まって、結果、郷土愛着であつたりとか、知識も深まっていくのではないかと。

人のネットワークに関しては、学校外での活動や地域の活動を行ったことによって、学校では構築されにくい、地域や他の学校との世代を超えた人的ネットワークが構築されていったと考えられます。

また、商店主自身が、参加者である高校生との活動を通じて、どのような変化が生まれたのかということに関しては、御覧のような形になっています。

その主体性の発揮にはどのような要素が必要かと考えてみますと、まずは地域住民の関わりと、関係性の変化が必要ではないかと考えています。

地域、商店街に関わったことによって、学校での生徒という役割ですね。あるいは家での子供という立場、役割とは違う、新たな第3の自分。新たな自分での役割、立場が付与されることによって、関係性の変化。殻を破るというものも生まれて、能動的な行動が促されている。

土肥さんの先ほどのお話の中でもありましたように、主体的に検討、実践する機会も必要ではないかと考えております。

まちづくり活動の問い直しということで、私が研究をする中で改めて感じたのは、まちづくり活動というのは何事も、その活動によって、例えば、まちづくり活動をすることによって、こういう新たなものができましたよとか、こういう成果が上がりましたよという、その成果をどうしても意識しがちなのですが、実は、その過程が大事だよねと、ややもすると体育会系的な根性論にもつながる気もしますが、とはいえ、その過程を通じて、このクリエイトまち塾という活動を始めたのも、よくよく考えたら、東北新幹線の開業に何か自分が資することができたかということ、そんな大したことはなくて、むしろその活動の中で生まれたネットワークしかり、そこでの学びしかりが今に生きているなと思っていますので、そういう意味では、過程を大事にしていくというのが大事なのかなと思いますし、それこそが実は大事なのではないかと。

そして、青少年が活動する中では、学校であつたりとか、お家の中にはとどまらず、それまでに関わってこなかったような地域の人たち。例えば商店街というのはどこのまちにでもあつて、サイズ感というか、規模感としても活動しやすい、認識しやすい規模だと思っています。

そういう意味でも、商店街であったり、地域というのをフィールドに、いろいろな人が関わっていく。それによって高校生を始め、青少年自身が開花していくのではないかと考えております。

そういったところが今まで、私自身が今、活動する中で持ち得る結論、考えだと思っております。お時間も来ましたようですので、一旦こちらで締めさせていただきたいと思えます。

ありがとうございました。

## 質 疑 応 答

○司会 ありがとうございます。

それでは、引き続き、まず、久保田先生に何か御質問等がありましたらお願いできればと思います。

御質問のある方はいらっしゃいますか。

○参加者4 よろしいでしょうか。

この青森での取組というのは、事務所のようなものがある商店街でずっと、同じ場所で、同じ商店街の中で活動されてきているものなのでしょうか。

○久保田氏 そうですね。青森市の場合は、青森駅は新幹線が止まらないほうの駅なのですが、昔は青函連絡船の発着駅にもなっていて、それを起点に商圏が広がっていった中心商店街で大きいのがありますので、そこを拠点に。立ち上げ当初からそこでのつながりがありましたので、そのネットワークを生かしながら、今も昔もそこでやっております。

○参加者4 他の場所での似たような取組に関与しているとか、他の地域づくりとの交流とか情報交換といったものはあるのでしょうか。

○久保田氏 そうですね。他の地域であったりとか、他の活動との交流に関しては、例えばここ数年、青森市内でも、例えば高校生が主体となって文化祭を自主的にやってみたりとか、高校生がお土産屋さんと連携して青森のお土産をつくったりとかそういった活動もありまして、年度末の活動の発表会に招いて、成果発表会でお互いにそういう活動の紹介をし合って、刺激し合う機会をつくったり、年に1、2回、過去には同じ北東北の秋田県大館で活動している高校生や福島県の高中生らとの交流なども行っているところです。

○参加者4 ありがとうございます。

○司会 そのほか、ございますか。

○参加者5 大変わくわくするようなお話を、どうもありがとうございました。

先ほどから1つ気になっていることは、こういう団体からプロジェクトまでとお二人の先生もおっしゃってくださいましたけれども、やはり成果の検証と効果のところも1つありますけれども、社会的な効果だとか、いろいろな指標もあると思うので、特にまちづくりだとか人材の育成というテーブルに落とし込むのが難しいようなところが、何か効果をはかるような取組がこのとおり出ている。団体からプロジェクトに落とし込んだものですが、何か意識していらっしゃることを聞かせていただけますか。

○久保田氏 ソーシャルインパクトに関しては、やはり活動する中で本来重要な指標であります。それは認識しつつも、ソーシャルインパクトを正しく測るには、ある程度の活動の規模感も当然必要になってきますし、その規模感にまだと申しますか、規模としてみっかりと測る大きさにもなっていない、できていないというのが正直なところです。

ある程度、30人程度でもしっかりと定量的あるいは定性的にはかれる手法があれば、そ

れを採用していきたいと思いますが、現状は事前アンケート、事後アンケートをとって、それで参加者自身がどう変化したかというのは毎年っております。

あとは、お金も限りがある中で、インタビューであったりとか、そういった簡単なレビューのアンケートが、現状我々が持ち合わせている成果指標かと考えています。

○参加者5 ありがとうございます。

○参加者6 お二人に質問させていただいてよろしいですか。

○司会 それでは、このあたりからお二方への質問の時間に切りかえたいと思います。どうぞ。

○参加者6 お話をありがとうございました。

国際交流を、いろいろな国に青年を派遣したりとか、船で十数カ国の外国人青年と交流しながら、まさに国際社会ですとか、皆さんのような地域社会でのコアリーダーの育成を目的とした事業をやっているのですけれども、その観点で2つほどお二人に御質問させていただきたいのですが、まず、1つ目は、お二人がこのようなまちづくりに携わろうとされたきっかけみたいなことを伺いたくて、土肥先生のほうは沿革を見させていただきますと、若者エンパワーメント委員会で活動されていたということですが、若者エンパワーメント委員会の話で周りに影響される方がいたのか。また、久保田先生は新幹線の関係ということですが、普通に新幹線のお話を聞いても、ちょっと問題だなと思いつつも、そこから組織を立ち上げるというのは、やはりもう一步、何かきっかけがあったのかとか、まず、そういったきっかけを伺いたいと思います。

お願いします。

○土肥氏 質問と本質がずれてしまうかもしれないですけども、きっかけはもちろん、先ほど言っていたように、大学にたまたまそういうサークルがあって、たまたま続けていたらこうなってしまったみたいな感じなのですけれども、私は高校生とかを見ていると、きっかけよりも続ける理由のほうの方が大事だと思っていて、きっかけは結構いろいろなところにあふれていると思うのです。例えば、学校でも地域活動を開いていますし、職業体験とかもやっているのですけれども、その後、続ける理由になるものは何なのかというところのほうの方が大事なのかと思って、例えば先ほどの久保田さんのお話を聞いたときにも、新幹線の問題があったときに、多分地元の方にも知り合いがいて、事務所が気づいたら手に入れられたみたいな話だと思うのですけれども、僕が先ほどお話しした大学生のカフェの話も、こういうことをやりたいと言ったときに、それを応援してくれる、要するに、周りの仕組みみたいなものが整っているかどうかのほうは、きっかけよりもそちらのほうの方が大事なのかと最近は思っています。

○久保田氏 私の場合は、新幹線の開業と、この前に入れることもあるスライドがあるのですけれども、そもそも私は当時、中学生のときにネットラジオをやっておりまして、インターネットラジオをやる中で、仲間内でわいわい盛り上がって行って、それをもうちょっと大きくしたいなと思ったときに、新幹線の開業に向けて、地域が疲弊しているんじや

ないかみたいなニュースを見たときに、自分たちがやってきたラジオと、新幹線の開業というのがうまく結びつくのではないのかと思って、そういう活動のスタートに至っているのかと思っています。

○参加者6 2つ目の御質問は、先ほど申し上げたように、我々は国の立場で、特に私のいる課は国際交流を通じた形で若い人たちの育成という形で励んでいて、お二人は民間という立場で励まれている、多分、問題意識としてはかなり共通するところも多いとは思いますが、民間として活動されていく中で、いろいろ教育委員会とか行政とかと関わられている機会もあったかと思うのですが、何か自治体なり国なりの、民間である程度限界があったりとかも感じられているとは思いますが、自治体とか国の行政に対して何か、ざっくりでもいいのですが、何かこういうところは民間でできないので力を入れていただきたいみたいな要望があれば教えていただきたいと思います。

○土肥氏 それでは、私からいきます。

これはすごく簡単な話なのですが、お金をつけてくれるとありがたいと思っています。

例えば欧州とか、税率の問題とかもいろいろあるとは思いますが、ヨーロッパとかを見ていると、若者に関する、例えば生徒会活動の全国支援組織みたいなところが、国から年間で3億円ぐらい予算をもらっていたりとか、非常に若者団体に対しての補助金は大きいかと思っていて、僕はこれは日本のNPOの課題だとも思うのですが、要するに、そういう行政的なサービスというか、民間の立場で子供とか若者に関わるということをやろうとするときに、僕らは行政に頼らずにしようとする、どこかで稼ぎ出さないといけないところが出てきてしまって、そうすると、要するに、僕は本来こういうものは公共の中で担っていく必要があるのではないのかと思ってやっているので、それを何か市場の中でやっていかなければいけないとなると、例えば評価の話だったり、SROIとかで、要するに、それを全部金銭的にはかかっていくというふうになるのですが、僕は人権の問題だと思うのです。なので、権利の問題を金銭換算するという感覚はちょっとおかしいのではないかと個人的に思っている部分があって、そこを民間だけでやっていくと限界があるのかと個人的には思っています。

あとは意思決定過程に対して参画をさせていくというところに関しては、実質的にまちづくりの意思決定をしているのは自治体の政策とかになってくると思うので、そこに参画させていくというところは、自治体とか行政に対して求められるかと思っております。

○久保田氏 そうですね。行政をお願いしたいことと考えますと、私はこういった、私自身が地域の中で活動して、いろいろ成長できたと考えていますので、そういう意味では、もっと若い人たち、あるいは高校生、中学生が地域に出て行って、経験ができるという環境であったりとか意識の醸成を図ってほしい。

それはめぐりめぐって、多分政策であったり、予算のお話にもつながってくるのかもしれませんが、意識醸成という部分。そう考えると、実際、私たちの活動は、高校1年生の

子たちとかは今、新しい大学入試の試験方式に変わる年でもあって、新テストでは結構地域での活動であったり、必ずしも学力だけには頼らない評価に変わるという話も聞く中で、そういう意味では、そういう学力以外、勉強以外の部分の評価もされ始めているのかとは思いますが、引き続き、地域に出ていく環境の整備であったりとか、意識の醸成というのはさまざまな省庁ではかっただけだと思っています。

○参加者6 意識の醸成とか、新テストの話がありましたけれども、教育というのが結構役割としては大きいというのが。

○土肥氏 そうですね。

○参加者6 環境づくりというのはなかなか難しいと思うのですが、国もしくは自治体として関わりとしたら、商店街活性化への補助金とかそういった意味なのか、もうちょっとソフトというか、もうちょっと本当に雰囲気。国や自治体がやろうとすると、なかなかそれも難しいのですが、そういうイメージがあるのですか。

○土肥氏 単にそういう団体にお金を補助として出す、委託として出す。その予算を中央省庁が面倒見るということは当然あるとは思いますが、あとはそういう活動がしやすい環境を整備するという面を考えれば、こういった事例をもっと積極的に発信していただいたりとか、そういうことによってもまた環境づくりにもつながってくるのかと感じました。

○司会 そのほか、何かございますか。

どうぞ。

○参加者7 土肥さんにお伺いしたいのですが、続けるということをすごく大事にしていってやるのがよくわかったのですが、いずれ運営している皆さんも若者ではなくなっていくと思うのですが、参加したい若者はどんどん入ってくると思うのですが、同じ熱意を持って、運営を続けていこうという人材の発掘とか育成についてはどのようにお考えでしょうか。

○土肥氏 いい質問と言ったらあれですが、一番悩んでいるところですね。

それは多分、どこの団体も悩んでいることなのかなと思ったりはするのですが、ただ、私自身もフェーズが変わってきたと思っていて、大学生のときに関わっていたときと、今、高校生との距離も、どんどん年が離れてきて、もう何かおじさんの感じに高校生たちから見られているらしいのですが、離れていくというか難しいと思っていて、私は割とやいばるの現場で入ることは好きだったので、ちょっとここはもう手を離さなければだめだと思って、次のメンバーに移すような形で、今、私はやいばるは全く手をつけずに運営していくようにしていますし、人材の育成というところで難しいなと思っているのは、割と子供とか若者と関わるNPOの場合は、大学生が斜めな関係で関わっていくという枠組みの中でやっているのですが、ただ、大学生が卒業していくと、せっかく育っていたと言うとあれですが、高校生との関わりとか、地域との関係性をつくっていった人がまた抜けてしまうと、またゼロからのスタートみたいな感じになってしまうの



で、そこをしっかりとコーディネーターとして、入れる人を雇えるぐらい体力のある団体に育てていかないといけないというふうに今は思って、そういうふうにかじ取りをしているような方向です。

○参加者7 ありがとうございます。

○参加者8 同じ質問を久保田さんに。

○久保田氏 そうですね。

まさにおっしゃるとおりで、立ち上げた人間の熱量を次の人にどうやって、あるいは特に学生団体というのは、おっしゃっていたようにいつかは代替わりというか、いつかはなくなる人たちなわけで、そう考えたときに、それを5年前に考えて出した1つの答えがクリエイトまち塾で、ゆくゆくはもしかしたら商店主がこのかじ取りをする、コーディネートをしていくということも考えられるかと思っていて、実際に年2回、商店主と地元の大学生スタッフ、あとは私を囲んで、年に2回、夜に「職員室」という飲み会をしているのです。青森の人たちはゆっくり飲む人が多いので、そうなると大体1時過ぎまで、まち塾とはかくあるべきだみたいな話を商店主から伺うことがあります。それだけ活動していくと商店主も高校生の一生懸命な熱意を持った姿を、「すごくかわいい」と思ったりとか、意識変容を起こして、もっと関わっていきたいという思いもあるようです。そういう中では、私と同じ熱量、方向性かどうかということは別にしても、意識や熱量を持ってクリエイトまち塾、あるいはまた若干違った形になるかもしれませんが、それはあり得るのかなと思っています。

○司会 最後にお二方に、今日は地域を担う人材の育成ということでテーマといたしましたけれども、それに向けて一言、提言的なお話を最後にまとめていただけて、それで締めとさせていただきたいと思うのですが、何か提言的な話があれば、お願いできればと思います。

○久保田氏 先に私から。

これは提言というよりも、私の1つの決意でもあるのですが、これはまち塾という活動をもって、その中で活動している高校生が地域を担う人材ですという話ではなくて、実は高校生がその2年間、3年間で商店主と一緒に活性化の活動をしていく。その中で得た経験や、悔しさとかいろいろ含めて、持った思いを将来、地元に戻ってくるのか、あるいは、東京に出て引き続き地域と関係を持ったりとかという関わり方もあると思いますし、そういう形で、地元と関係を持ちながら活動したりとか、そういう活動を通じて得た思いを将来実践したりとか、何らかの形で活用する、そして、活躍する。そうなったときに初めて地域を担う人材が育成されたと思っていますので、私自身、この活動を通じて、それを楽しみにしながら活動を続けていきますし、これからも地域を担う人材の育成に向けて頑張っていきたいと思っています。

ありがとうございます。

○司会 土肥先生、お願いします。

○土肥氏 ありがとうございます。

個人的には、時代と言ってもそんなに何年も生きていないのですけれども、ちょっとずつ若者に対してフォーカスが当たってきていると感じています。例えば僕が2014年ぐらいの頃にYECとして活動しているときに、これだけ子供とか若者の話は、子供の参加とか若者の参画という話は出てこなくて、特に若者の話で言うと、ニート、引きこもり支援の話であったりだとか、就職難の話であったりだとか、課題にフォーカスが当たるような形で出ていたのが、最近は子供・若者の参画というところで焦点が移り始めて、18歳選挙権への引き下げとか、18歳成人のところとかも影響しているのかもしれないのですけれども、フェーズが変わってきていると思っていて、逆にいうと今、個人的な危機感としては、世界的な動きを見ていると、日本の子供参画とか若者参画というのはすごく遅れているなという印象があるので、そこを提言と言うのかわからないのですけれども、僕自身もそうですし、うちの活動としても、静岡というエリアを中心としながら、全国に波及していきたいという思いでやっているの、そこをうまくネットワークしたりですとか、もうちょっとここでの議論を、どの辺に焦点を当てながら活性化していくのかというところは、国のほうからしていただけると、僕らとしても活動しやすくなると思いますし、国全体として変わっていくのではないかと思っています。

○司会 どうもありがとうございました。

それでは、改めて講師の土肥先生と久保田先生に拍手をお願いできればと思います。

以上で青少年問題調査研究会を終了いたします。どうもありがとうございました。